

現代社会に主体的に生きる自己を確立するための思考力の育成 —社会的事象を身近にとらえさせるアクティブ・ラーニングを通して—

長期研究員 緑川 祐

《研究の要旨》

生徒たちは社会に出てから、答えのない問題に向き合う場面が多くなるであろう。したがって公民科の学習においても、生徒たちが主体的・対話的に学ぶことで、社会的事象を自らの問題として多面的・多角的にとらえ、社会の一員として自覚することを促したい。本研究では、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を試み、主体性を育む思考力の育成をめざした。

I 研究の趣旨

現行学習指導要領の公民科では「広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察」する能力を育成することが求められている。また、次期学習指導要領改訂に向けた「論点整理」（中央教育審議会、2015年8月）でも「答えのない問題に自ら答えを見いだしていく思考力・判断力・表現力」の育成が課題であるとされた。現状は、例えば倫理において「単に思想家や思想についての知識を習得する科目」という認識で教師が授業を行っている（日本学術会議、2015年5月）という指摘がある。この指摘は、学習内容を自分自身の問題として考える必要性を自覚させないまま、暗記再生型の授業に終始しているということである。

したがって、現代社会に主体的に生きる自己を確立するための思考力を育むことが課題である。この課題に対応するためには、社会的事象に対して、自分と他者の間にある見方や考え方の違いを見だし、それらを人間、科学、自然などの側面に結び付けて考察できる力の育成が必要である。

以上から、アクティブ・ラーニングを通して社会に主体的に向き合う態度を養うことで、多面的・多角的に思考できる生徒を育てたいと考え、本主題を設定した。

II 研究の概要

1 研究仮説

公民科の授業において、以下の視点に基づいた手だてを講じれば、社会的事象を身近にとらえさせ、現代社会に主体的に生きる自己の確立に向けた思考力を育むことができるであろう。

【視点1】 既習の知識や概念と自分との関わりを見いだす工夫（対自化）

【視点2】 他者と自分との関わりを見いだす工夫（相対化）

【視点3】 社会と自分との関わりを見いだす工夫（深化）

2 研究の内容（倫理での実践を例に）

(1) 生徒の実態把握

研究計画に基づいた授業実践に先立ち、研究協力校の該当生徒40人に意識調査を実施した。特に「倫理の授業に、現在・将来の自分に生かせる何かを期待しているか」の質問に対して、肯定的回答は9人とどまった。理由は「難しいから」「自分が希望する職業には関係がないと思うから」などであり、学習内容を自分の在り方生き方に結び付けていない現状が明らかとなった。

(2) 各視点における手だて

① 【視点1】 対自化

「対自化」とは、生徒が学習した知識や概念が、自分に身近であることを見いだす活動である。社会的事象が、自分にどのように関わるかなどを、理由を含めて生徒各自で思考する。手だてとして、社会的事象と自分との関連をイメージマップに記述させることで可視化し、関連すると生徒が考えた理由も文章で書かせる。

② 【視点2】 相対化

「相対化」とは、生徒が【視点1】で関連付けたこととその理由について他者からの感想を得ることによって、自分の考えを多角的にとらえ直すための活動である。手だてとして、4～5人のグループを作らせ、各自のイメージマップをグループ内で発表させ合う。関連付けた理由に対して共感的感想と批判的感想をグループ内の他者に述べさせる。その際、感想を述べる側には前もってワークシートに共感と批判の感想を記述させておくが、ここでは記述内容を声に出して伝える活動を重視する。最後に、活動の感想を書かせることで振り返りとする。

③ 【視点3】 深化

「深化」とは、【視点2】で培った多角的な見方に加え、社会的事象を多面的に思考できるようになることをめざす活動である。現実の出来事を題材に、立場が異なる人々の考えや、それらから結び付く様々な側面を踏まえた考察を通して、思考を深めることがねらいである。手だて

